

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 中部大学春日丘中学校 (※正式名称を記載)
種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☐ 小学校 ☐ 小中一貫^{※注1}
☒ 中学校 ☐ 中高一貫^{※注2} ☐ 高等学校
☐ 教員養成大学 ☐ 専修学校、各種学校
☐ 特別支援学校
☐ その他（例：小中高一貫）

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒487-8501

愛知県春日井市松本町 1105

E-mail cross-cultural@haruhigaoka.ed.jp

Website http://www.haruhigaoka.ed.jp

幼児児童生徒数 男子 186 名 女子 119 名 合計 305 名

幼児・児童・生徒の年齢 13 歳～15 歳

2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

※報告書提出時点～平成 30 年 3 月末までの活動は、予定（見込み）として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

① 活動内容

A. 異文化交流会について

日本の文化を学び、姉妹校で伝えると同時にカナダの文化を学ぶ。

交流会では中学 3 年生の全生徒が日本文化を伝えている。内容は「よさこい」、「折り紙」、「武道」をはじめとした日本独自の伝統、文化、歌などを披露で、9 月下旬より活動をはじめ、2 月まで準備している。

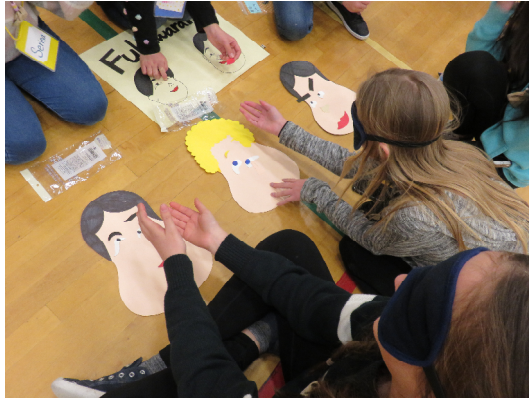
今年度は「郡上おどり」「書」の披露をした。「郡上おどり」は学年全体で定期的に居残り練習し、当日披露した。また、書については「咲」を額に入れプレゼントした。これとは別に、音楽や朝学習の時間を利用して練習してきた「カナダ国歌」の四部合唱を全員で合唱した。



B. 文化交流学習会について

日本、カナダ両国の文化を互いに共有し、学び合う活動。

事前準備として、「着物の着付け」、「日本の遊び」、「書」、「染め物」などを班ごとに準備した。午前は各ブースにカナダの生徒を招き、体験していただいた。逆に、午後はカナダの原住民の分化を日本の生徒が学んだ。両国の分化について体験を通じて学ぶ機会となった。



C. 多文化共生学習

個々が国際社会で共感、協調して生きていくためのテーマに沿った事前学習、現地調査を行い、レポート形式で報告する。

カナダ語学研修旅行に備えて、理科や社会の授業の中で、さらには特別授業を課し、SDGs の観点を踏まえた自然科学、科学技術に関する諸問題やカナダや民族について広く学習した。さらに、ESD学習として様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組み、現代社会の課題を知り、その課題の解決につながる価値観や行動を生み出して持続可能な社会を創造していくことの必要性を学んだ。その原因に向き合って、解決するためにできることを考え、自然と命のつながりを感じ、伝統や文化と触れながら、人と自然、人と人との共存や多様な生き方を学ぶための第一歩として、いくつかのテーマ*から生徒一人一人が1つ選択した。10月頃から具体的な事前学習を行い、日本での問題点や現

段階での自分の意見などを日本語でまとめた。

* 設定されたテーマ：環境、人口、エネルギー、国際理解、生物多様性、気候変動、防災、世界遺産、地域文化など（学年によって異なる。）

カナダ語学研修中のバンクーバー班別研修での現地交流やホームステイ中のインタビューで、個人テーマについての自分の意見を発信、共有し、カナダでのとらえ方やインタビューした人の考え方をまとめた。帰国後はすべてのテーマにおいて、多文化が共生していくために持続発展社会を作るために行うべきことを考える機会を持ち、提言を考え、それをまとめた。

【別途資料あり】

ア. 活動分野（複数選択可）

■ 1. 環境	■ 2. エネルギー	□ 3. 防災	■4. 生物多様性
□ 5. 気候変動	■ 6. 国際理解、文化多様性	■ 7. 地域の伝統文化、文化遺産	□ 8. 人権・平和
□ 9. 健康・福祉	□ 10. 食育	■ 11. 持続可能な生産と消費	□ 12. 貧困
□ 13. エコパーク	□ 14. ジオパーク	□ 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
□16.ジェンダー平等	□ 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input checked="" type="checkbox"/> 5. その他(居残り学習会)	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

独自教材（カナダ語学研修ガイドブック）
生徒個人による書籍、検索サイト等

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。

活動は中3の9月下旬よりカナダ語学研修担当の教諭によって計画され、学年主任を中心として各教科、学級担任が指導に当たっている。学年の特色、生徒個々の適性に応じた指導計画により柔軟に対応している。

基本的に学級活動の時間と理科・国語の授業の一部を利用している。また、Wifi環境が整っているため、タブレットやPCを利用したAL、調べ学習、報告書づくりをしている。出発前に直前全体指導で3日間、帰国後は2日間を特別時間割として振り返り、まとめ学習の日としている。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。

このカナダ語学研修は25年続いてきており、各学年が前年度の取り組みを踏襲し、さらに有効な計画を立案し実践してきている。近年は、ICT環境充実により、事前の学びが主体的かつ対話的になり、情報の共有が可能になってきた。ただし、帰国が卒業式直前ということもあり、個人研究の発表がレポート形式と職員による評価のみになっている。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。

文化交流会については帰国後に全校集会を通して披露、研修記は各クラスごとに冊子化して次年度への参考資料に、個人研究は個々の取り組みと教員による評価のみである。時期的な制約が大きく、外部への報告は資料のみになる。中高一貫校であることから、高1での報告会等も検討したが、新年度からはSGH活動もすぐに始まるため持ち越すことが難しい現状にある。

- ⑤ ESDの推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。

活動内容の発信については積極的に行ってきていないが、例年、カナダ語学研修を魅力に感じ入学する生徒が増えてきていることが入学者アンケートから分かる。また、協力していただいているカナダの姉妹校とも良好な関係を構築できており、この研修を通して学ばせたいことなど、目指しているところなどを実践しており情報交換できる貴重な機会となっている。

⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成（地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など）

他の団体との交流や講師派遣依頼などは、該当学年の実施する計画に基づいている。特に、日本文化や踊りなどの指導に地域で活動している先生方をお招きし、指導していただいたことも多々あるが、組織的に行われているわけではない。文化祭では中部大学、外部講師との交流が盛んに行われている。

⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成

ユネスコスクールに加盟はしていないが、カナダのミドルスクールは北欧と並び先進的な教育実践や学びが積極的に行われている本校がお世話になっている2校の姉妹校との関係は長く続いており、3月の語学研修時以外にも11月に本校に教員と生徒数名をホームスティとして受け入れ（昨年度より）、学校をあげて積極的に交流が行われている。

⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）

ESDやSDGsの観点での学びは生徒の物事のとらえ方や考え方に大きな影響を与えると思われる。我々教員が、生徒の学びの着地点を明確に把握できる点において指導の一貫性や授業方法が過去に比べより充実、改善されてきた。また、事前学習から発表の方法で課題はあるものの事後学習までの計画、実践は研修としての位置づけを明確にする効果があり、保護者からも貴重な経験ができたとの報告を受けている。

(3) 平成 30 年度の活動計画

平成 29 年度同様の内容を計画している（新中 3 の担当者による）。

<目的>

- (1) 中学校生活の国際理解の総まとめとして、カナダ語学研修を位置づける。
- (2) カナダでの生活体験を通して、自国との相違を発見し、異国および異文化への理解を深める。
- (3) カナダの人々の生活や文化に接し、国際感覚を育て、国際的視野を持つ。
- (4) 姉妹校との交流により、友好を深め、多くの友人をつくる。

<準備と研修中の活動>

- (1) 生徒一人ひとりが、次のことにとり組む。
 - ・ 個人の研究テーマを設定し、テーマに基づいて日本に関する現状を調査する。テーマに基づいてカナダで調査を行い、共通点・相違点をまとめ理由を考察する。
 - ・ 研修班毎にテーマを設定し、テーマに基づいて日本に関する現状を調査する。テーマに基づいてカナダで調査を行い、共通点・相違点をまとめ理由を考察する。
 - ・ E-mail やクリスマスカードなどで交流をはかる。
 - ・ カナダ語学研修のまとめを「旅行記」として発行する。
- (2) 教科や特別活動・個別などの時間を利用してカナダについて事前学習をする。

<研究のまとめ、発表会>

- (1) 日本とカナダの類似点や相違点を発表する。
- (2) ホームステイ中に話し合ったテーマについて発表する。
 - 《テーマの例》
 - ・ 環境問題・・・自然環境を守るためにどんなことが必要だと言われているか。
 - ・ 人口問題・・・自国の中で、あるいは世界的に人口の何が問題か。
 - ・ エネルギー問題・・・電力はどのように供給されているか。
- (3) 多文化が共生するために、今後の持続発展社会に向けて何が必要だと考えるか、また、自分はどのようなことができるかを提言としてまとめる。